

第3節 「仕事と生活の調和」実現度指標の動向

ポイント



- ☆ 5つの個人の実現度指標のうち、今回更新した「仕事・働き方」分野、「家庭生活」分野、「健康・休養」分野はいずれも改善。
 - ☆ 3つの社会の実現度のうち、「健康で豊かな生活のための時間が確保できる社会」は引き続き改善し、「多様な働き方・生き方が選択できる社会」も改善傾向。
 - ☆ 環境整備指標は、保育サービスの提供等の増加を反映して上昇してきたが、就労による経済的自立可能性が近年低下しているため、2009年も低下。
- ※データ公表時期の関係で、必ずしも最新の状況が反映されているわけではないことに留意が必要。

(1) 「仕事と生活の調和」実現度指標の概要

「行動指針」では、数値目標の設定や「仕事と生活の調和」実現度指標の活用により、仕事と生活の調和した社会の実現に向けた全体としての進捗状況を把握・評価し、政策への反映を図ることとしています。実現度指標は行動指針でその「在り方」が示され、それに基づいて作成されています。

「仕事と生活の調和」実現度指標とは、以下の3つの状況の進展度合いを測定するものです。

- ①我が国の社会全体でみた個人の暮らし全般に渡る仕事と生活の調和の実現状況（＝個人の実現度指標）
- ②「憲章」及び「行動指針」で示された仕事と生活の調和が実現した3つの社会の実現状況（＝個人の実現度指標をもとに測定）
- ③個人が様々な活動を選択することができるような官民の取組による環境の整備状況（＝環境整備指標）

また、働く人のみならず、無業者、高齢者を含めた多様な人々を対象に、我が国の社会全体でみた仕事と生活の調和の実現度を数量的に測り、評価・分析することにより、仕事と生活の調和実現の阻害要因や、取り組むべき政策及び政策の優先度の把握に資することを目的としています。

「仕事と生活の調和」実現度指標の体系は次のとおりとなっています。

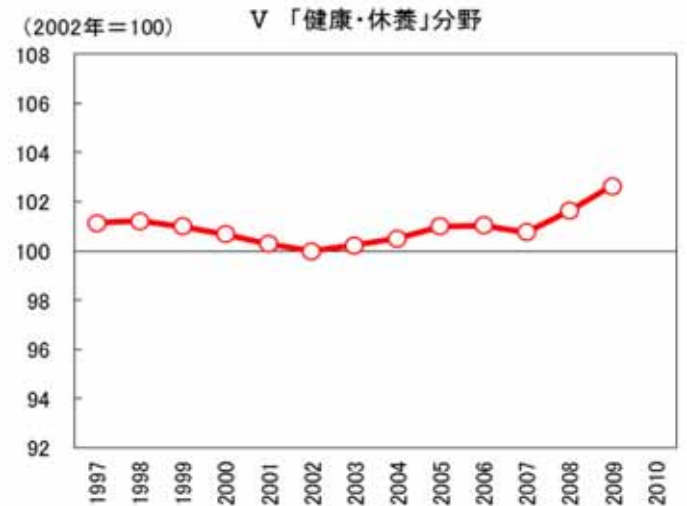
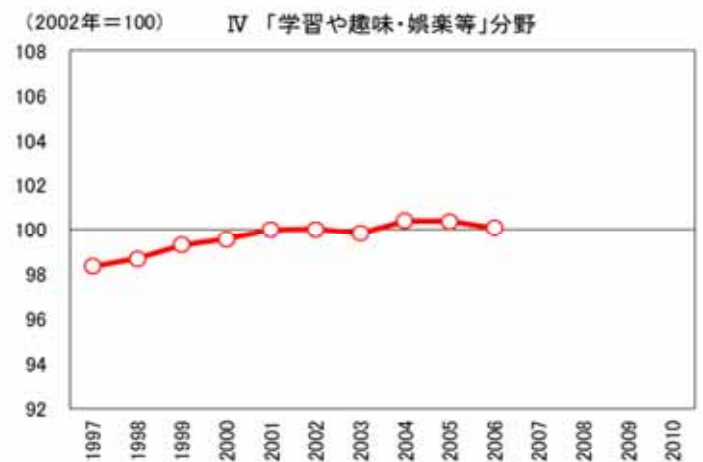
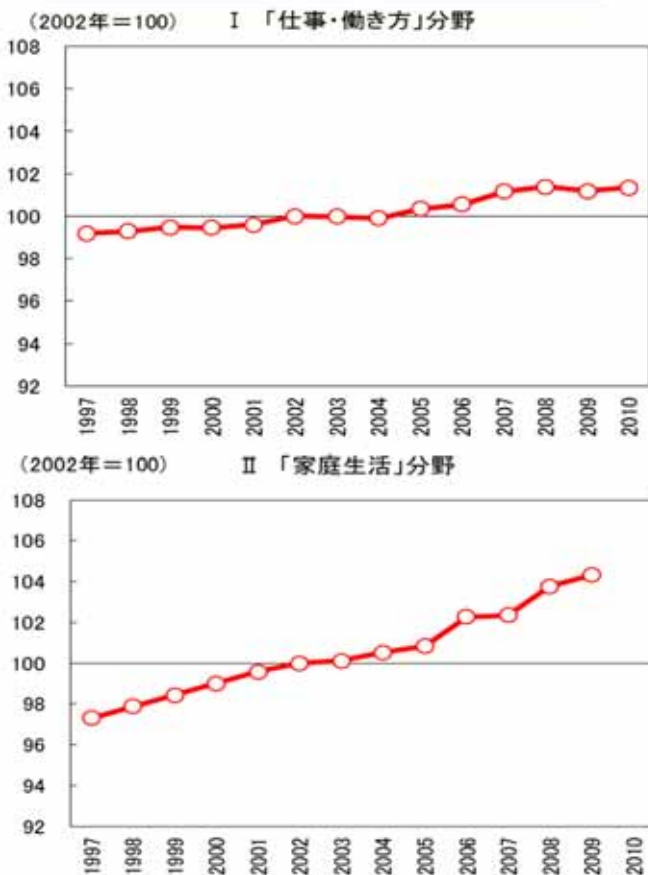
- 「個人の実現度指標」と「環境整備指標」の二つの指標から構成。
- 個人の実現度指標は、「Ⅰ．仕事・働き方」、「Ⅱ．家庭生活」、「Ⅲ．地域・社会活動」、「Ⅳ．学習や趣味・娯楽等」、「Ⅴ．健康・休養」の5分野から構成。
- 個人の実現度指標のうち「Ⅰ．仕事・働き方」分野から、「憲章」及び「行動指針」で示された仕事と生活の調和が実現した3つの社会の実現度を算出。
- 環境整備指標は、分野を設けず一つの指標として算出。
- 両指標とも2002年を基準年として算出されており、指数の上昇は、仕事と生活の調和が進展していることを、また、指数の低下は後退していることを示す。

(2) 個人の実現度指標の推移

個人の実現度指標について、5分野ごとに1997年以降の推移をみると次のとおりです。（Ⅰ分野は2010年、ⅡⅤ分野は2009年、ⅢⅣ分野は2006年まで）

Ⅰ「仕事・働き方」分野は、女性が出産・育児等に影響なく（継続）就業できているか、仕事のための拘束時間が過度に長くなっていないか、といった面で前年よりも状況が若干改善したことから、一旦足踏みの状態であった2009年と比較して、2010年には若干改善の傾向がみられます。Ⅱ「家庭生活」分野は、男女の家事・育児等への関わりが増加していることなどから、引き続き改善しています。Ⅲ「地域・社会活動」分野は、交際・つきあいが希薄になっていることを反映してこのところ低下しています。Ⅳ「学習や趣味・娯楽等」分野は概ね横ばいで推移しています。Ⅴ「健康・休養」分野は、健康診断等の受診率が増加していることなどから、直近では改善しています。

図表3-3-1 個人の実現度指標



(注1) 上記指標は、2002年を基準年として指数化したものであり(2002年=100)、各分野の各年の水準は、当該分野の基準年と比較した相対的な状況を示している。

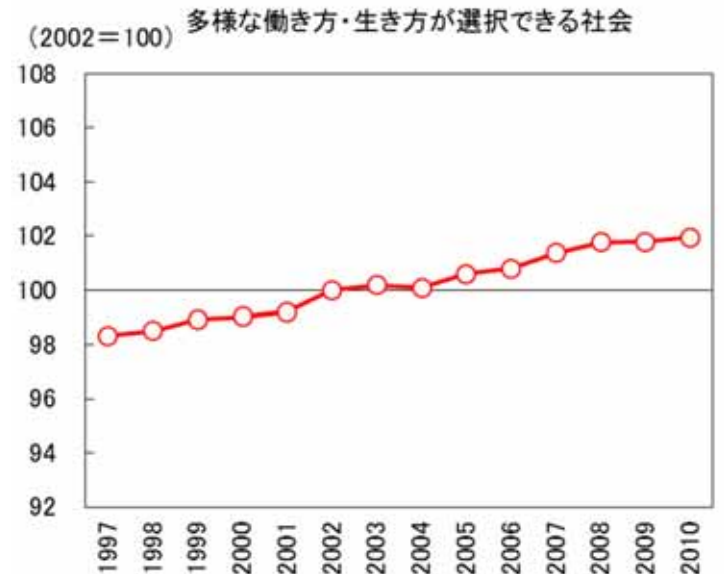
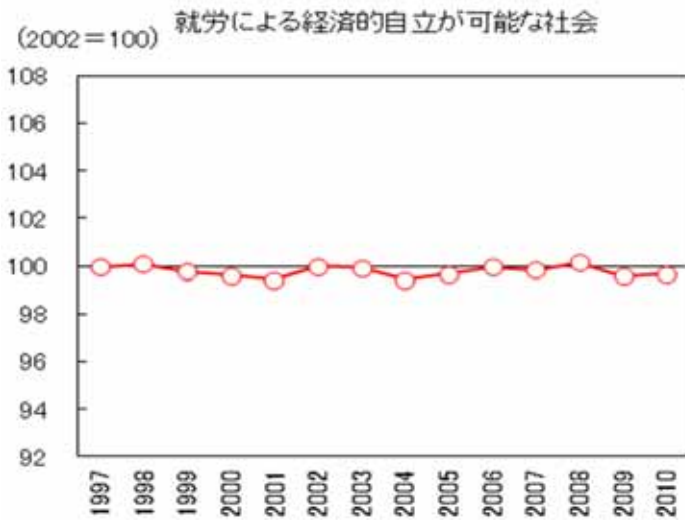
(注2) 指数の上昇(低下)は、各分野における仕事と生活の調和が進展(後退)していることを意味する。

(注3) 実現度指標の更新方法については、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ分野は毎年更新し、Ⅲ・Ⅳ分野は厚生労働省「社会生活基本調査」の公表に併せて更新する。ただし、Ⅱ・Ⅴ分野は2009年まで更新している。

(3) 3つの社会の実現度の推移

3つの社会の実現度の推移を、1997年から2010年までについてみると、「就労による経済的自立が可能な社会」は概ね横ばいで推移しています。一方、「健康で豊かな生活のための時間が確保できる社会」は仕事のための拘束時間が改善傾向にあるため、上昇しています。「多様な働き方・生き方が選択できる社会」については、女性が出産・育児等に影響なく(継続)就業できる機会が増え、待遇面での公正性が向上傾向にあるため、全体として改善傾向がみられます。

図表3-3-2 3つの社会の実現度



(注1) 上記指標は、2002年を基準年として指数化したものであり(2002年=100)、各社会の姿の各年の水準は、当該社会の姿の基準年と比較した相対的な状況を示している。

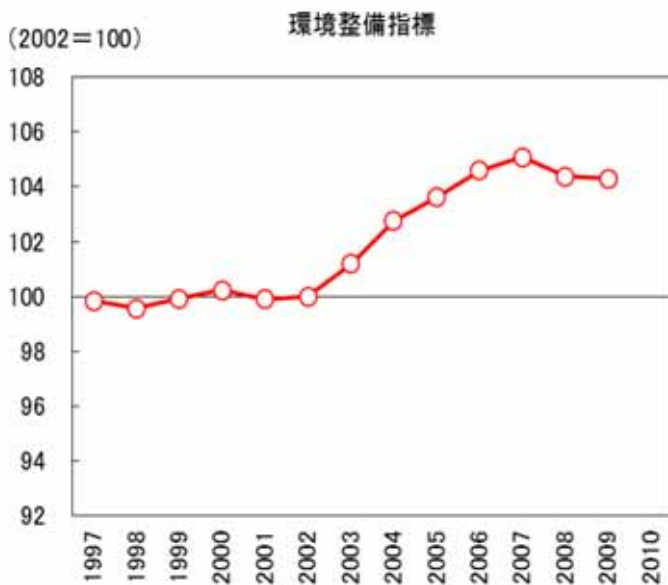
(注2) 指数の上昇(低下)は、各社会の姿の実現度が進展(後退)していることを意味する。

(注3) 3つの社会の実現度は、①「I 仕事・働き方」分野の構成要素から算出されており、行動指針に記載されている数値目標全てを含んでいないこと、②数値目標以外の構成要素も含めて算出していること、に留意する必要がある。

(4) 環境整備指標の推移

環境整備指標の推移を、1997年から2009年までについてみると、地域における保育サービスの提供等の増加を反映して近年上昇してきましたが、直近では、就労による経済的自立が可能な社会に関する数値の低下から、2年連続で指標が低下傾向にあります。

図表3-3-3 環境整備指標



(注1)上記指標は、2002年を基準年として指数化したものであり(2002年=100)、各年の水準は、基準年と比較した相対的な状況を示している。

(注2)指数の上昇(低下)は、官民の取組みによる環境の整備状況が進展(後退)していることを意味する。

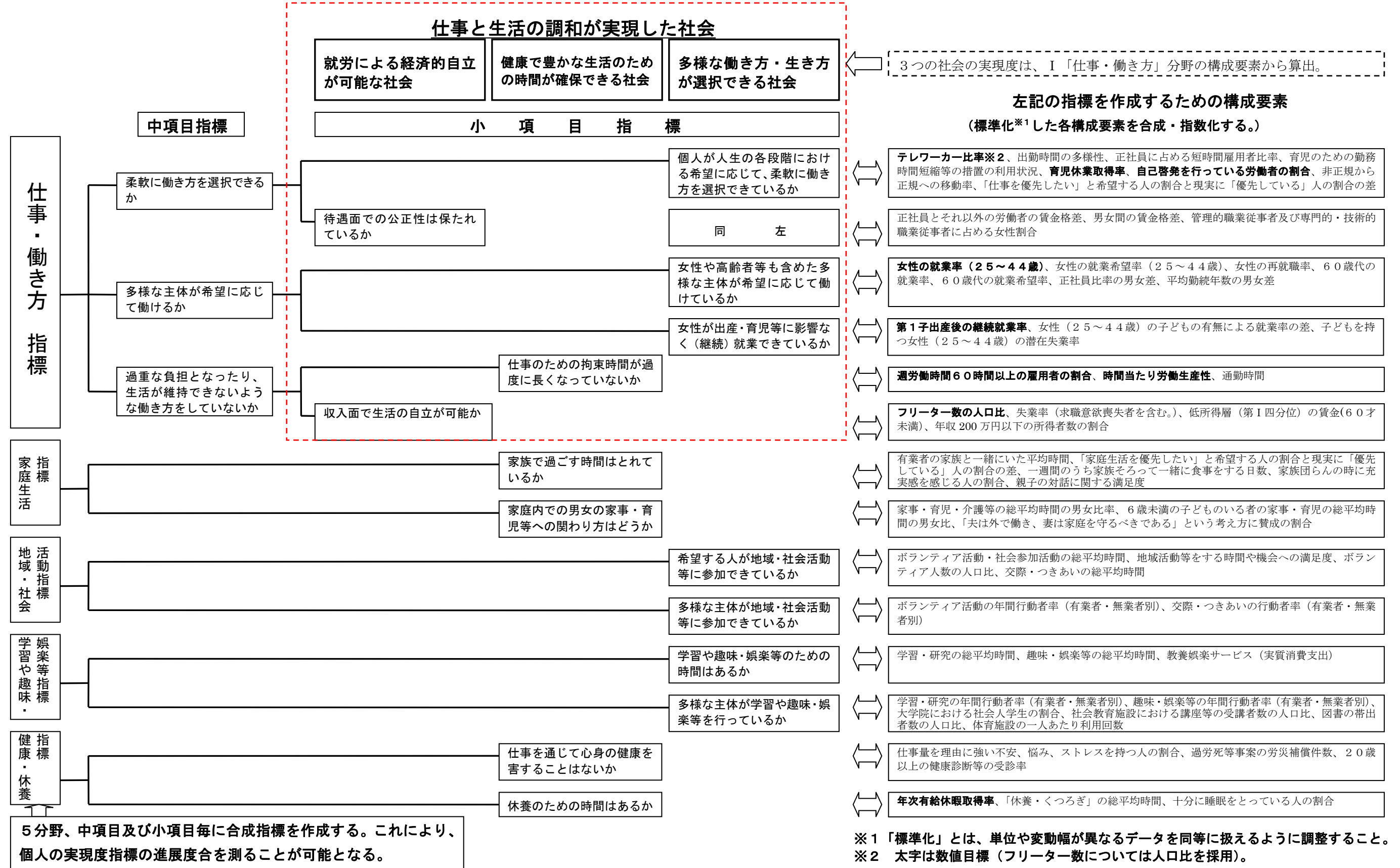
(注3)環境整備指標の更新方法については、毎年更新する。ただし、構成要素である統計データの公表時期を勘案し、2009年まで更新している。

「仕事と生活の調和」実現度指標の全体図

「仕事と生活の調和」実現度指標は、我が国の社会全体でみた①個人の暮らし全般に渡る仕事と生活の調和の実現状況と、②それを促進するための官民の取組による環境の整備状況を数量的に把握し、その進展度合いを測定するものである。

I. 個人の実現度指標

「個人の実現度指標」は、5分野毎に指標を測定する。各5分野別の指標は更に、中項目、小項目指標に分かれる。小項目指標を行動指針における「仕事と生活の調和が実現した社会」で整理することにより、その状況を把握することが可能となる。なお、各指標は、本行動指針で定める数値目標のほか、仕事と生活の調和に関連する統計（構成要素）を合成することにより作成する。



5分野、中項目及び小項目毎に合成指標を作成する。これにより、個人の実現度指標の進展度合いを測ることが可能となる。

*1 「標準化」とは、単位や変動幅が異なるデータを同等に扱えるように調整すること。
*2 太字は数値目標(フリーター数については人口比を採用)。

II. 環境整備指標

環境整備指標については、分野を設けず一つの指標として測定する。なお、同指標は、本行動指針で定める数値目標のほか、仕事と生活の調和に関連する統計（構成要素）を合成することにより作成する。

